

あとがき

今回、「わいわい道中記／100回記念号」が50回記念号に引き続き無事執筆できたのは、冒頭で記載させて頂いた71名をはじめとする沢山の母校出身の厚い熱いご声援とご尽力のお陰だと思っています。特に巻頭言を執筆頂いた谷本静男様には感謝また感謝の気持ちで一杯です。また、100回記念号ができたのは、四半世紀にわたり筆者の思いつきによる拙い旅行プランでしたが、ブレない歩き方（各駅立ち寄り）に固執したからだと思います。すなわち、筆者を信頼頂き、長い間、皆様にお付き合い頂いたお陰です。感謝の気持ちで一杯です。

多くの参加者が集まるために、時にはどこの沿線にするか頭を悩ました。始点と終点、集合時間、終点界隈での反省会など。しかし、100回のわいわい会を振り返ってみて、このようなチェックポイントを偶然にも無難にクリアしており、「上手く鉄道沿線を選択したなあ」と思っています。また、数回ですが、「一人歩きによる下見が多少なりとも効果を発揮したなあ」と思っています。

このようなことから、“100回記念号”が、わいわい会活動として執筆でき、「他の学校や諸団体などにも誇れる最高の“四半世紀成果物”になった」と、手前味噌ですが確信しています。しかも、書籍である“わいわい道中記／50回記念号”と異なり、財布に易しい、時代の流れを勘案したPDF読本（デジタル著書）の恰好で誕生しました。このため、母校出身者に限らず何方も、見たいときに何処からでもスマホで見たい場面を気軽に閲覧できます。

今、思い出に残る場面をデジタル著書で確認すると、当時の懐かしい場面がそれなりに再現でき懐かしくなります。よくぞ四半世紀にわたり、記録を書き続けたものだと。同時に記録の重要性を改めて強く認識しました。このような成果は、カッシー館ブログに毎回丁寧にアルバム形式で旅日記として残したからだと思っています。この公開のお

陰で、先日、下記にあるネットでも予期しない懐かしい写真にも遭遇しました。このような場面は、長年にわたる丁寧なデータの集積の賜物であると思っています。今、お金をいくら出してもこのような懐かしい写真は購入できませんし遭遇もできません。これも偏にコツコツ蟻子のようにわいわい会の活動状況を旅日記として、拙い筆で日々データを集積したのが功を奏しと思っています。



2015年12月13日（土）高松一高関東桜紫会の忘年会（田町界隈の居酒屋）

また、記録を紐解くと、最長老の寺西修司様の元気な参加の場面が登場し、胸が熱くなります。更に第54回わいわい会から第96回わいわい会まで毎回参加して頂いた大崎武久様、第84回わいわい会から第100回わいわい会まで毎回参加頂いた溝縁義文様などが登場して懐かしくなります。



※初のわいわい会新年会（寺西先輩を囲んで：2025年1月21日（火）～新宿天狗）

わいわい会活動をお陰で、2000年5月から開始した一人歩きの旅が、1万7千キロ（2025年7月31日（木）、伯備線伯耆大山駅、活動日数842日）を突破しました。そして、巻頭言でもご紹介頂いた通り、2025年11月末現在、通算で1万7千356km（活動日数859日、日本の鉄道網の62.7%、地球円周の43.3%）を達成しました。これらの数字はあくまで途中段階の数値で2万キロを目指しています。また、国立国会図書館には72冊納本しています。このような成果物は、四半世紀にわたり、わいわい会活動をやらせて頂いた賜物だと思っています。「塵も積もれば山となる」「継続は力なり」を強く感じたことはありません。

このような成果に対し、単独歩きによる四半世紀の誕生日を2025年5月3日（土）に迎え、アクチュアリーの友人である今治久昇様から、東急田園都市線の二子玉川駅界隈の店でお祝いをして頂き、改めて“歩き鉄旅による四半世紀樹立”に対し、達成した重みを強く感じました。また、みどり生命のカッシーファンから2025年9月25日（木）

池袋界隈店で1万7千キロ達成のお祝いをして頂きました。更に、高松一高の皆様にも、わいわい会100回達成を記念して、元町・中華街“菜香”で2025年12月6日（土）祝って頂きました。これまでの25年の苦労が一気に報われたような気がします。皆様に感謝また感謝で一杯です。この場をお借りして熱く厚く御礼申します。



※AIによりイラストを描いてもらう

わいわい会も2025年12月6日（土）で満了となります。若い世代の方が、別の形でわいわい会を継承して頂ければ幸いです。最後に、この著書が、次の世代への橋渡しになること、また、日本や海外の方に同窓会活動等のご参考になることを祈願して、筆をおきます。[最後までお読み頂き誠に有難うございました。](#)

2025年12月吉日

わいわい会主幹事 横原 勉